

の治療師として人民戦争に動員されたこと、村にいてマオイストとネパール国軍の双方の治療を行なったことなどさまざまな体験を語った。

またマオイストであるナムジェ氏は、

「私たちは治療師の活動を否定しませんでした。伝統的な薬草の知識は素晴らしいものであり、その知識を進んで取り入れようと思いました。マントラや祈祷などは精神には訴えかけますが、科学的でないという理由でそれを行なう治療師たちに教育を施すことはしていませんでした。しかしながら私たちは彼らの仕事自体を否定することはしませんでした。」

と語る。社会主義下に置かれた国々では、宗教活動に対して否定的な態度が示され、モンゴルやロシアなどをはじめとする国々ではそれに伴って伝統医療に対する圧力が加えら

れた。一方マオイストの勢力下に置かれたタバ村ではヒンドゥー教に対してこそ否定的な態度がみられたものの、独自のマントラや神と結びついた治療師たちの実践は必ずしも否定されなかった。マオイストと治療師たちは対立関係に置かれていたわけではなかったようだ。

2006年の平和合意後、タバ村では公的医療機関での出産奨励政策や交通機関の発達によって都市の医療機関を頼る人口が増加し、伝統治療師をとりまく状況は変化し続けている。しかしながら彼らは単に古くからの知識を継承する消えゆく存在とはいえない。人民戦争というネパールの激動の時代を生き、た彼らはまた、新たな時代とともに立場を変えながらも生き続けるのではないだろうか。

---

## 「客人たちの父」預言者イブラーヒームのおもてなし

—パレスチナ自治区・ヘブロン／ハリールの食事配給施設を訪ねて—

山本健介\*

### 2つの名をもつ町

パレスチナ自治区の町・ヘブロン (Hebron) /ハリール (al-Khalil)。2つの名で知られるこの町は、ヨルダン川西岸地区の南方に位置

し、セム的一神教の祖、預言者イブラーヒーム (アブラハム) と深い関わりをもつ。ヘブロン、ハリールという名は、それぞれヘブライ語、アラビア語で「友」を意味し、イブ

---

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

ラーヒームが「神の友」とされた伝承がもとになっている。クルアーンにも、「アッラーは、イブラーヒームを親しい友〔ハリール〕にされたのである」（婦人章125節）とある。この町が、預言者イブラーヒームに因んで呼ばれるのは、彼とその家族（妻サラ、息子イサクとその妻レベッカ、孫のヤコブとその妻レア）が眠る墓廟の存在による。現在はその廟の上にイブラーヒーム・モスクが建てられている。

イブラーヒームは、現在のイラクに生まれ、<sup>1)</sup>放浪の末、ヘブロン／ハリールに住み、先立った妻を洞穴に葬った。ヘブロン／ハリールは、預言者イブラーヒームに因んだ町として、イスラームでは、ときにマッカ、マディーナ、エルサレムに次ぐ第四の聖地といわれ、ユダヤ教においても、エルサレム、サファド、ティベリアと並ぶ四大聖地のひとつとされる。このような宗教的重要性も一因となり、イブラーヒーム・モスクは、さまざまな勢力による争奪戦を経験してきた。イブラーヒーム・モスクは、キリスト教の教会（ビザンツ帝国）、モスク（イスラーム征服）、教会（十字軍）、モスク（イスラーム王朝）という変遷を経て、現在はその内部にユダヤ教の礼拝施設が存在するに至っている。パレスチナ問題との関わりでいえば、1994年に生じた、ユダヤ人による礼拝中のムスリムへの銃撃事件が最も大きな出来事であった。モスク内にユダヤ教の礼拝所があるという奇妙

な状況は、この虐殺事件を契機にイスラエル政府がとった措置である。

イブラーヒーム・モスクが辿った数奇な来歴はまだまだ語り尽くせないが、今回は、このモスクの北西の入り口から向かって左側に注目したい。そこにはアラビア語で「タキーヤ・イブラーヒミーヤ」（al-Takīya al-Ibrāhīmīya、以降タキーヤ）と書かれた看板が見える。あえて日本語に訳すとすれば、「イブラーヒームの旅人休憩所」といった感じになるだろうか。

#### 「イブラーヒームのおもてなし」とその整備

このタキーヤは、ワクフ（寄進地）によって、ハリールの住民やそこを訪れた人々に無料で食事を提供している。このような食事配給制度のはっきりとした起源は明らかではない。しかし、その背景には、やはり預言者イブラーヒームの存在がある。

イスラームにおいてイブラーヒームは、しばしば、その「寛容性」が強調され、<sup>2)</sup>「客人たちの父（Abū Dīfān）」というクンヤ（渾名）ももっている [Shurrāb 2006: 83]。この町では、少なくとも10世紀頃から、客人や訪問者に無料で食事（スイマート・ハリールと呼ばれる）を振る舞う風習があったといわれる。だが、これらの食事の提供が組織的に行なわれるようになるのは、サラーフッディーンによるパレスチナ解放を経たマムルーク朝期であり、タキーヤという名称その

1) 旧約聖書の「ウル」が、現在のイラクのウル遺跡であるか、トルコのウルファであるかについては議論がある [竹下 2010: 72-73]。

2) クルアーンの（撒き散らすもの章：24-27）では、見知らぬ来客に食事を振る舞うエピソードが記述されている。



写真1 イブラーヒーム・モスクの全景



写真2 預言者イブラーヒームの墓標

ものはオスマン朝期に現れた。このようなシステム自体は比較的新しいものであるとしても、それは、イブラーヒームの客人へのもてなしの精神に起源をもち、預言者が眠る町の民が継承し続けてきた結果として存在する。

パレスチナの都市の多くは、サラフッディーンのアユブ朝を経た後のマムルーク朝、オスマン朝にかけて黄金期を迎えた。エルサレムへの巡礼が盛んになるとともに、ヘブロン／ハリールにも、預言者たちの墓を目指し、イスラーム神秘主義者をはじめとする多くの旅人が訪れ、現在の旧市街（イブラーヒーム・モスクの周囲）は栄華を極めた。このような訪問者の増加と、町の発展の中で貧困が問題化し始めたことを背景とし

て、スマート・ハリリーの組織的な提供が開始され、タキーヤの整備が進んだ。そしてオスマン朝期には「ハリールは、その民が飢えを知らぬ町として知られていた」[Zalūm 2001: 70].

#### タキーヤ・イブラーヒミーヤの運営風景

筆者は、タキーヤやスマート・ハリリーについて、渡航以前から文献資料を通じてその存在を知っていた。とはいえ、これらが現代にまで継承され続けているとは思ってもみなかった。もともとの現地調査の想定には入っていなかったが、モスクの左手にその存在を確認して以降、興味が惹かれ、訪れてみることにした。

実際にタキーヤの入り口にたどり着くと、タキーヤの職員は、筆者とごく簡単な挨拶を交わし、半ば強引に中へといざなった。筆者が訪れたのは11時40分頃。かつては、訪問者に朝、昼、晩の三食振る舞われていた食事も、資金難から現在は昼食のみである。すでにその日の配給は終わり、職員が丁寧に大鍋の掃除を行っていた。筆者は、その日の配給のスープの残りやコーヒーを御馳走になりながら、しばし談笑する機会を得た。その日のタキーヤでの滞在はさほど長いものではなかったが、帰る頃には旧知の仲のような雰囲気は漂っていた。

次に筆者がタキーヤを訪れたのは、月曜日であった。金曜日と月曜日には、肉類（鶏肉、羊肉）が振る舞われる。筆者は11時前にタキーヤに到着したが、そこはすでに多くの人々で賑わっていた。筆者の見立てで

は、だいたい100から200人程度が集まっていたように思う。ちなみに、タキーヤの管理に当たっている、ワクフ省傘下の組織、ハリール・ワクフ管理局 (Mudīriya Awqāf al-Khalīl) によれば、ムスリムが日中の断食を行なうラマダーン月には毎日肉類が振る舞われ、利用者は数千人にのぼるといふ。

配給が始まると、並んでいた人々は、我先にと容器を差し出す。そして、ドアを隔てた内側にいる職員たちは、鶏肉とスープを素早く容器に入れ、それを別の扉から渡す。慣れた手つきで、容器に鶏肉が入れられていくが、その数はどのように決めているのか。筆者が尋ねたところ、家族の大きさをなんとなく把握し、適当な量を決めているという。なかには、「もっと肉を入れてくれ!」と、容器を突き返す人もいる。その要望に対しても、職員は応じたり、応じなかったりと一様ではない。日本的な尺度からいえば、決して十分にオーガナイズされた仕組みではないように思えるが、それでもなんとか上手くまわっている。

だいたい鶏肉の数は600-700羽であるといわれたが、30分ほどですべての配給を終えた。その様子をボーッと見ていた筆者に、職員のひとりが鶏肉を差し出してきた。「食べなさい」と言うので、筆者も遠慮がちに頂いたが、肉は柔らかく、非常に美味しい。申し訳なさそうにする筆者に対して、職員は「宗教にかかわらず、このタキーヤは誰でも利用できる」と語ってくれた。「訪問者への施し」という中世以来の伝統からすれば、東アジアからの訪問者である筆者も、その範疇



写真3 食事配給の様子(1)



写真4 食事配給の様子(2)



写真5 盛況するタキーヤ

に入るようであった。タキーヤでの食事について、街の住民の中には次のように語る人もいた。「タキーヤで出されるスープなどは当然家庭でも食べる機会がある。でも、なんだかタキーヤのものはそれよりも美味しいような気がする。」雑談の中で冗談めかして言われ

ていたが、食事の質の高さもタキーヤが町の人々に愛され続ける理由のひとつなのだろう。

#### 紛争の中のタキーヤ・イブラーヒーミーヤ

筆者の聞き取りによれば、24年間タキーヤに勤務している古株のハティーブ所長を筆頭に、ほとんどの職員が10年以上勤務している。10年前のパレスチナといえば、2000年に生じた大規模な民衆蜂起であるアクサー・インティファダの影響が色濃く残っていた時期である。この蜂起に対するイスラエルの対応は、経済状況の悪化をもたらし、パレスチナ自治区全体、なかでもハリールの状況を大きく変えた。民衆蜂起の時期から勤務している職員の多くは、ハリールが苦境に立たされてきた10数年をこのタキーヤからみてきた。

イスラエルの政策による経済的な衰退は、タキーヤにももちろん大きな打撃を与えた。第一に、度重なる外出禁止令と封鎖政策によって、ハリールのパレスチナ人は自由な移動が許されなかった。ハティーブ所長によれば、タキーヤはインティファダのさなかでも毎日活動を行ない、イスラエル政府による閉鎖命令などは受けなかったという。しかし、その受益者となるパレスチナ人の移動が不自由なため、インティファダ期におけるタキーヤの利用は、その近隣に住む住民に限られていた。そして、第二に、2000年以降のハリールにおいては、貧困層の割合が大きく増加した。蜂起を鎮圧するイスラエルの政策は次第に緩和されたものの、一度職を失っ

たパレスチナ人が新たな仕事を見つけることは容易ではなく、ハティーブ所長の見立てでは、タキーヤを利用する人口は40%近く増加した。このような貧困の蔓延によって、タキーヤの果たす社会的役割は増大したのである。

#### むすびに

現在の筆者の主要な関心は、紛争の中で荒廃したハリール旧市街の復興事業である。先行する研究では、このタキーヤの存在はほとんど語られてこなかった。食事の無料配布という形で、貧困層の人々の生活に直結する問題を扱うタキーヤが、旧市街の復興の中で、極めて重要な役割を担っていることは疑う余地もない。長引く紛争の中で、現在のタキーヤの役割は、中世以来のそれとは大きく異なっているだろう。しかし、その機能を変えながらも、必要とする人々のために食事を施すというイブラーヒームのもてなしの精神は、預言者の町に今も変わらず生き続けている。

「おもてなしの国」日本から来た筆者は、預言者伝来のおもてなしを体感し、中世の趣を残す美しい旧市街をあとにした。

#### 引用文献

- 竹下政孝. 2010. 「神の友、アブラハムの物語」『中東協力センターニュース』34(5): 71-78.
- Shurrāb, Muḥammad Muḥammad Hasan. 2006. *Al-Khalīl: Madīna ‘Arabīya Filasṭīniya*. ‘Ammān: Maktaba al-Ahliya.
- Zalūm, Ḥumūda. 2001. *Al-Khalīl: al-Tārikh, al-Ḥaqāra, al-Turāth*. ‘Ammān: al-Mu‘allif.